

冬のからりとした青空が移ろい春の暖かな日射しを浴びて澄んだ水のように輝き、植物の芽吹きが始まると同時に山の稜線も色を見せるこの季節に、私たち63回生は卒業します。

本日は感染症の流行により開催形態が難しい中で先生方をはじめ開催にご尽力いただいた方々には、卒業生代表として感謝申し上げます。

今、私たちは卒業の瞬間を迎えています。「卒業」を英語で表現すると「graduate」ですが、これは学位の意味を持つ「grade」から派生しており、その重みをさらに実感することが出来ます。それは、6年間のこの学校での軌跡が、決して楽な「卒業」への登山ではなかったことも、併せ持つ不思議な言葉です。

中1・2年生の時は学校や先輩から保護される存在、高1・2年生の時は部活や委員会を主導する存在、高3の時は受験勉強に只管集中する存在。低学年のとき先輩達が卒業していくのを目の当たりにし、誰しもがこのプロセスを経験するのかなと思いましたが、自分がその当事者になったことに感慨を覚えます。

この6年間で最も自分の記憶に刻印されたのは、コロナ・パンデミックという思い出とひと言で片づけるにはあまりにも悔しい出来事でした。世の中に閉塞感が漂う中で、部活や委員会の最高学年として何が出来るかを仲間と考え、厳しい環境で何が最善なのかを追求したことは稀有な経験でした。勉強の時間問題を解くに当たり、そうした最善の追求という営みへの既視感を味わったものです。

「辿り来て未だ山麓」これは将棋の升田幸三実力制第4代名人の有名な言葉です。駒場東邦を卒業してからは、箱根山や高尾山のように登山鉄道のない山を基本は自力で乗り越えなければなりません。しかし突然社会に放り出される不安感は、この学校で得た知恵を生かせば、必ず克服できると信じています。

今私たちは混沌とする激動の時代を生きています。ポスト・コロナの時代では過去のものに固執しない斬新な価値観が求められるでしょう。まさに私たちの世代が、正面に立ち課題解決に取り組むこととなります。この学校を卒業すれば私たちも自分の人生を歩んでいきますが、中高時代を共に歩んだという連帯感是不変のものです。この学校で学んだことを生かし皆でより良い世界を目指していきたいと思います。

最近「文化資本」という言葉が流行しそれが社会問題となっています。文化資本とは金銭などの経済的資本ではなく、周囲の環境から生まれる文化的な素養のことを指す言葉で、子供たちに大きな影響を与えられていると言われています。首都圏のような美術館や本屋が普通に存在する世界は決して当たり前ではありません。この1年間大学受験の勉強に励む中で、自分たちがどんなに恵まれているのかを痛感しました。実際、文化資本の違いというのは実態が捉えづらい面もあり解決が非常に難しい問題で、未成年の自分たちが何をしようと無責任に思われてしまうかもしれません。おそらくこれらを存分に活かして社会に貢献し、ゆくゆくは様々な形で還元していくことが、今の私たち出来る最大限のことなのだと思います。

私たち63回生は、首都圏の地元や私立の小学校から同じ駒場東邦という中高一貫校を志望してそこへ入学した集団です。私は6年間地元の公立小学校で過ごしたので、駒場東邦に

入り私立小学校の友人の話聞くなどして、自分に馴染みのない環境を知ることが出来ました。社会に出れば、私たちとは全然違う環境出身の人たちとの出会いが待ち受けています。全国や全世界の沢山の人が出会うことで、自分の視野を広げていくことが、狭い世界に住む私たちにとっては、より重要なことかもしれません。それは卒業後でないと味わえない貴重な体験だと思います。

勿論駒場東邦での学習を通じて得た知恵は非常に貴重なものです。しかし、この学校で出会った素晴らしい友人や先生方は、それを凌駕する程の財産でもあります。自分の気持ちが憂鬱な時に励ましの言葉を与えて下さった63回生の仲間や後輩たちには、本当に感謝しています。また、まだ人間としても未熟な自分を中学の頃から見守り続けて下さった先生方には感謝するとともに、様々な形で恩返しが出来たらと思います。

最後に、私たちの成長を見守りまた私たちの活動を常に支えて下さった保護者の皆さま、本当に有難うございました。今後とも私たちを見守り続けて下されば幸いです。

駒場東邦で六年間自分たちを支えて下さった全ての方々に深く感謝申し上げ、答辞とさせていただきます。

令和四年三月七日 卒業生代表 安部俊太郎